

文学研究はいかに既存の「詩学」理論の「呪縛」から自由になれるか

北海学園大学人文学部 テレングト・アイトル

比較文学（文学素材や方法の起源遡源の探求）の視点からみれば、東洋文学（東方文学ともいう）文学それ自体において、カテゴライズから鑑賞の仕方ないし研究方法まで、大凡西学東漸してから全面的に刷新されてきたと言える。とりわけ作品について具体的な分析方法は、システムティック的に日本語を通じて東洋全体に展開され、たとえば叙事詩(epic)、抒情詩(lyric)、劇(drama) それら自体の定義やジャンル(category; genre)分けから主題(motif; theme)、思想(thought; idea)、物語(muthos; narrative; story)、語り・筋・プロット(muthos; plot)、リズム・拍子、構造・構成(structure; construction)、人間像・特徴(ethos; character; figure)、スタイル・文体(style; figures)や模倣・写実(mimesis; imitate)など、その起源を遡源すれば、いずれも、概ねアリストテレスの『詩学』『修辞学』『靈魂論』などに行き着くか、あるいはその枠組や規範から派生して展開してきたことが確認できる。たとえ現代の美学や文学理論においてすら、いずれもその起源の原型や枠組や用語が応用され、自明なことである。

一方、アリストテレスは、「歴史はすでに起こったことを語り、詩人は起こる可能性のあることを語るという点に差異がある(…)。したがって、詩作は歴史にくらべてより哲学的であり、より深い意義をもつものである。というのは、詩作はむしろ普遍的なことを語り、歴史は個別的なことを語るからである」(『詩学』1451b)と言明しており、文学には多大な可能性を付与し、歴史よりも文学は人間の行為の真実に迫られることを示唆している。

事実、現に方法論においてわれわれの文学研究は、たとえ自覚しようとしまいと、殆ど自明的にアリストテレスの切り開いた枠組に従って作家・作品を研究している。しかし、その代わり、アリストテレスのいう文学は「より哲学的であり、より深い意義をもつものである」という文学の役割についての探求は、ある意味においてほとんど想起されず、疎かにされているか、あるいは作品の鑑賞の次元において充足してきたと言える。

本発表は、モンゴル文学の現代叙事詩の「デヒィン・ゾクソール」(B・ヤボーホラン1929-1982)を取り上げ、アリストテレスの『詩学』『修辞学』などから生成されてきたパースペクティブを通じて、詩人とテキストが伝える事柄は、いかに詩学的な読みによって、また「閉鎖的諸概念」を前提にし、静止的な読みとして受け止められているかを明らかにし、そこで改めて文学によって明示され、かつまたは暗示されているものは、どのように元来の「詩作は歴

史にくらべて (….) より深い意義をもつもの」、より「普遍的なこと」として
言表され表明され、認知されうるか、その可能性について検討してみたい。





ТЭХИЙН ЗОГСООЛ: *Миний хайрт эцэг, нэрт анчин агсан Бэгз таны
гэгээн дурсгалд зориулав*